書　評

金田章裕　編，新藤正夫　著
『富山 砺波散村の変貌と地理学者』
ナカニシヤ出版　2011年６月　285頁
3,000円＋税

富山県は地理学者が多数輩出される地域として，日本の地理学界では確固たる位置を占めている。県内には本書が論じる砺波散村をはじめ，立山カルデラ，黒部川扇状地など，中学校・高等学校の地理教科書にもしばしば取り上げられる著名なフィールドを擁し，昭和初期から気鋭の地理学者たちが発見と業績を競ってきた。本書の著者である新藤正夫は，教員として長年教壇に立つかたわら，富山地学会や扇状地同人会の主要メンバーとして，富山県の地理学界を牽引してきた。

新藤は1933年に富山県西部の砺波市東別所の旧家に生まれ，結婚とともに砺波市小島の新藤家に入婿した。新藤家は広大な敷地にカイニョウと呼ばれる屋敷林をめぐらし，豪壮なアズマダチ様式の母屋が附属舎数棟を従えている。新藤家は砺波の散村にある家屋の典型であり，それ自体が彼の研究対象の一部をなしているとさえいえよう。散村の家屋であるため，公道から家屋敷地までは約100ｍの私道で接続され，積雪期にはこの道路の除雪が今も新藤の大きな負担である。

新藤は砺波平野に暮らし，砺波平野を生涯の研究対象としてきた。そして変貌する砺波平野の農村を，地理学の目でつぶさに観察・考究してきた。1955年に富山大学教育学部を卒業した新藤の，研究者としての活動期は，高度経済成長期を経て21世紀にいたる，砺波平野の激変期に重なる。この期間において砺波平野は，圃場整備による景観の変化，工業化にともなう兼業化の進展と生活様式の変容を経験した。いずれも砺波平野の歴史の中では劇的な変化であった。

本書は新藤が中心となり挙げられた数ある業績の中から，重要なものを編者の金田章裕が選び出し編集した，新藤の著作選集である。原論文の初出年は1958～2008年にいたる半世紀におよび，総じて20世紀後半から21世紀初頭にかけての砺波平野の変容の記録としての重厚さを備えている。

本書の内容は以下の通りである。

第１章　砺波散村の成立と展開
　Ⅰ　砺波平野の開発と集落（1）
　Ⅱ　砺波平野の開発と集落（2）
　Ⅲ　砺波市福岡段丘の新田集落
　Ⅳ　明治期の北海道移民
　Ⅴ　庄川扇状地扇央部の明治期の野畔について
第２章　砺波散村地域の近代化と農業
　Ⅰ　富山県における耕地整理事業の地域的展開
　Ⅱ　富山平野の花卉球根栽培
　Ⅲ　圃場整備に伴う砺波市の農業および農村の変容
　Ⅳ　散居集落の高度経済成長への対応と問題点
第３章　高度成長下の工業と農村
　Ⅰ　工場の進出に伴う地域社会の変容（1）
　Ⅱ　工場の進出に伴う地域社会の変容（2）
　Ⅲ　工場導入による農村の変化
第４章　地域の変遷と生活
　Ⅰ　砺波市上水道拡張事業実施の要因
　Ⅱ　庄川扇状地末端の湧水帯の衰退と暮らしの変化について
　Ⅲ　砺波散村の道路除雪に対する地域住民の取り組み
　Ⅳ　水と人と暮らしの移り変わりに学ぶ
第５章　散村の持続と問題点
　Ⅰ　砺波平野における明治期以降の散村の持続について
　Ⅱ　砺波市内のアズマダチ民家の調査
　Ⅲ　砺波平野とその周辺のアズマダチ民家の調査
　Ⅳ　台風23号による砺波市小島集落の屋敷林被害

第１章では砺波散村の形成過程が検討される。

砺波平野は庄川をはじめとする諸河川の扇状地が複合して形成された。扇状地面では庄川が乱流し，現在の庄川本流以外にも主に４本の旧河道が見いだされる。旧河道は礫質で表層土壌の被覆が薄いが，河道に挟まれた場所にはシルト層が分厚く堆積した微高地（マッド）が形成された。扇状地面の開発は古代に遡るが，本格的な開発は中世以降であった。近世には庄川の旧河道部にも出作

がなされ，さらには周辺の洪積扇状地や段丘上に開発が及ぶにいたって砺波平野の全面が開拓された。（第１章Ⅰ・Ⅲ）

砺波平野における散村の形成要因については，小川琢治の論文以来，有名な論争が展開された。本書ではそれらの議論を整理し，散村の起源に佐伯安一の「お藪」の研究から迫ろうとしている。お藪は農家敷地内の唐竹藪をさす。慶安期におけるお藪の分布がすでに散居を呈していることから，散村の成立が近世初頭に遡ると推定している。また，所有耕地を屋敷の周囲に集めようとする傾向が，家屋間の距離を遠ざける要因となったとしている。（第１章Ⅱ）

明治・大正期において，砺波平野からは北海道への出移民が多数輩出された。入植先における丹念な資料収集もさることながら，家屋の間取りや集落景観から「砺波的要素」を取りだし，移民集落における母村文化の維持・継承を，むしろ誇らしげな筆致で記述している点が印象的である。（第１章Ⅳ）

砺波散村の景観上の変化といえば，圃場整備事業ばかりが注目される。しかし，かつて扇状地面全体には網目状に灌漑用水路が流れ，これに沿って「野畔（クロ）」と呼ばれる河畔林が分布していた。新藤の目は劇的な変化の影でいつの間にか失われた扇状地の自然景観，野畔にも向けられた。野畔は錯綜した所有関係の下にあり，さかんに売買されていたこと，屋根材・燃料材を確保する貴重な林地であったことが明らかになった。まさに散村に暮らす新藤ならではの着眼である。（第１章Ⅴ）

第２章には，散村の近代化を農業の側面から分析した４編の論文が収められている。本章の論考はいずれも，圃場整備事業を砺波散村における変化の契機とみなしている。

本章ではまず富山県内における戦前期の耕地整理事業を流域別に概観している。戦前の耕地整理事業は，馬耕とレンゲ栽培を導入するための乾田化が目的であった。しかし耕地整理が実施された地域は扇状地末端に集中し，庄川・常願寺川などの扇状地面や低湿な海岸平野は未整理のまま残された。扇状地面における水田の定型化・大型化は，1960年代前半に始まる圃場整備事業と，用水合口化を中心とする農業水利事業により進められた。（第Ⅱ章１）

一方，砺波平野の農業を特色づける輸出用花卉球根栽培は，水田裏作として導入された。球根栽培は単位面積当たりの収益性が高く，水稲作と組み合わせることで，水田を効率的に利用できた。また，女性労働力を活用した労働集約的農業でもあった。この論文が書かれた1970年代半ばには，「米＋チューリップ」は収益性の高い安定的な農業経営のモデルであった。しかし，同時に進行する兼業化との関係にまでは論考が及ばなかった。（第Ⅱ章２）

砺波平野では1962年から圃場整備事業が始まった。これにより不定型で小規模だった水田は，30～40aの均質な大型圃場に造りかえられた。その結果は，①農業機械の導入と作業の効率化，②兼業化の進展，③農作業の外部委託として現れた。とくに兼業化は富山平野の工業化と軌を一にし，見かけは農家でありながら農業以外に生活の大部分を依存する，第二種兼業農家を生み出した。さらに兼業化が向かう先には，農作業の部分・全面委託が待ち構え，この受け皿となる稲作受託組織が1970年代以降多数設立された。農業の近代化と効率化を企図して進められた圃場整備事業は，結果として兼業化，さらには脱農化を進める要因となった。（第２章Ⅲ）

圃場整備は単に砺波平野の景観や農業経営を変容させたのみならず，散村の生活のあらゆる分野で劇的な変化をもたらした。新藤はミクロスケールな観察から，圃場整備事業の諸問題を指摘している。造成された圃場は全体として整った形状をなすが，散在する家屋群に阻まれて局部的にはいびつな形の耕地を生み出した。また，従来は散居する家屋の周囲に分布していた農地が，圃場整備によって分散の可能性をはらんでいたことや，施工時におけるライフラインの移転，宅地内に引き込む用水路の付け替えに経費を要したことなどを指摘している。（第２章Ⅳ）

第３章では高度経済成長下における富山県の工業化が，砺波平野にもたらした変容が議論される。富山平野では臨海部に重化学工業が立地しただけではなく，農村に滞留する潜在的な余剰労働力を吸収するため，扇状地面の農村部にも組立加工部門などの労働集約的な工業立地が進んだ。兼業の高度化と工業進出が共時的に進む現象を，新

藤らは「農工一体化」と規定した。

砺波平野への工場の進出の事例として，小矢部市のスズキ自動車と福光町の三協アルミが取り上げられている。両工場とも，水田を工場用地に転用したが，買収する土地が特定の農家に偏ることを避け，多数の所有者が少しずつ土地を提供し合う，いわば「供出」の形を取った。また，土地提供者およびその親族が優先的に工場に雇用されたことが指摘された。圃場整備と農業機械の導入による農業の省力化が兼業化を進め，結果的に労働力のみならず農地の余剰をも引き起こした。これにより農村工業の立地が促された。（第３章Ⅰ・Ⅱ）

国・県・市町村は，工業立地を進めるために農道整備や農業機械の導入といった農業振興策を矢継ぎ早に実施した。これらの諸施策は，農業の合理化・省力化を進め，労働力を工業に振り向けることを企図していた。その結果，従来農村にとどまっていた女性労働力が工業に吸収され，農家の主婦が工業労働者に変わった。農村工業の立地により，農村集落には活気が出た。とくに女性にとっての工場勤務は，金銭面での余裕だけではなく，精神的な解放や，新たな仲間との結びつきを生み出した。また，高齢者向けには在宅でできる内職の仕事が工場から発注されるようになった。高度経済成長期以降の砺波平野では，農業と工業が絶妙の組み合わせをもってひとつの生産・生活のシステムを形作っていた。新藤は，高度な水準にまで進展した兼業化を農業の衰退現象とはとらえず，新たな地域的システムの出現と見て取った。（第３章Ⅲ）

第４章では，砺波平野における日常生活における変容を，主に水利用の観点から論じている。

庄川扇状地は扇央部を中心に地下水位が低く，春と秋には季節的な井戸涸れが発生した。その一方で灌漑用水網が発達し，この表流水が飲用としても用いられてきた。砺波市の上水道整備の背景には，用水合口化によって伏流水が減少したことにともなう井戸涸れの長期化と，農薬使用などによる河川水の汚染があった。農村地域における上水道の普及には，このような地域的要因が関与していた。（第４章Ⅰ）

扇央部の伏流水地域とは対照的に，庄川扇状地扇端部の標高20～30ｍの地域には湧水帯が分布し，湧水（モッコン）を水源とする小河川が流れていた。湧水帯は湿田を形成し，ハンノキやエゴノキが繁茂する小河川では，ドジョウを捕って副収入を得ことができた。また，水量の多い河川は高岡までの舟運路としても利用された。一般に高燥な扇状地ととらえられがちな砺波平野にも，水郷のごとき湧水帯があったことを，改めて認識させられた。砺波の人びとと水の関わりを描き出すため，小学校の文集を用いている点も注目される。50年以上前に書かれた小中学生の作文からは，豊かな水に恵まれた扇状地の生活がよみがえる。（第４章Ⅱ・Ⅳ）

多雪地帯の北陸地方では，冬季の除雪作業が大きな問題である。ことに屋敷地が主要道路から離れている散村においては，末端道路の除雪まで行政の手が届かない。砺波市では農作業を受託する機械利用組合が，保有する機械の有効活用とオペレータの冬季就業確保のため，末端道路の除雪を請け負っている。（第４章Ⅲ）

21世紀に入り，新藤の関心は散村の環境・景観の持続に向けられている。第５章では散村における家屋分布パターン，およびアズマダチ民家の持続が議論される。

砺波平野において，家屋の分散的な分布パターンが変わらないことはよく知られている。減水深が大きな扇状地において稲作を行うには，屋敷まわりに耕地を集中させ，こまめに水管理をする必要があった。そのため，藩政期の田地割制下にあっても，水田の所有権と耕作権を分離し，耕作地を実質的に屋敷まわりに集中させた。農地改革による所有権の確定と，圃場整備による耕作区画の整理は，むしろ所有耕地の分散を防ぐ方向に働いた。その結果，屋敷のまわりを所有耕地が囲み，家と家が離れて立地する散居村の分布パターンが維持された。（第５章Ⅰ）

屋敷林に囲まれた巨大な切り妻平屋建ての，格調高い家屋をアズマダチという。アズマダチは加賀藩の武家の屋敷を模倣し，明治20～30年代に普及した。新藤らは，砺波市におけるアズマダチ家屋の悉皆調査を試みた。その結果，アズマダチの建築年代には1920年代と50年代の２つのピークがあり，決して「伝統的」な家屋様式ではないこと，冬の季節風を避けるために東側を表とすることなどが明らかになった。集計的な分析に加え，居住者への聞き取りに基づき，家を建てる苦労を

丹念に採集している。居住者たちの話からは，家に対する誇りや安らぎが読み取れる一方で，広すぎて維持管理に苦労する現状も明らかになった。近年，アズマダチの新築例は少ないが，砺波平野の農村の生活に適合した家屋であることが認識された。（第５章Ⅱ・Ⅲ）

以上を通読すると，新藤の砺波平野に注いだ視線がどのようなものであったがわかる。新藤は地理学者として砺波平野の変容を冷静に客観的に分析する視座を得ていた。しかしその一方，新藤は砺波に生まれ，今も家族とともに水田で稲を作り続けている。それゆえに，住み暮らす集落のみならず，自宅や新藤本人さえもが彼の研究対象となっている。すなわち，研究者としての視点と生活者としてのまなざしの両方を，新藤は兼ね備えている。併存する２つの視点のありようが，新藤の研究を地域に根ざしたものにしている。例えば，圃場整備事業によって心土が鎮圧され漏水が減り，水温が上昇したことなどは（99頁），実際に砺波で農作業に従事する者でなければ知ることができない知識であろう。砺波平野の農業と農村を熟知する新藤であるからこそ書けた記述を，本書のいたるところに見いだすことができる。

砺波平野に寄せる新藤の関心は，初期には高度経済成長下のドラスティックな変容に向けられた。圃場整備事業・工業化・モータリゼーションが，高度な通勤兼業化をもたらし，1970年代後半から80年代にかけては農工一体化という形で結実した。一家の主ばかりではなく，主婦や老人も農外就業から安定的な収入を得，自家農業で飯米を確保し，場合によっては農地を不動産市場にも提供する。結果的に所得水準の高い都市的な生活が，景観的には純農村といえる砺波平野に普及した。このモデルは堅実で勤勉な富山県人像にも当てはまり，多くの研究者に受け入れられた。例えば，1987年に出版された山本正三・北林吉弘・田林　明の編集による『日本の農村空間』[1] にも，この見解が強い影響を与えたことは想像に難くない。

1990年代以降，新藤は政策や経済を離れ，生活の側面から砺波散村と向き合っている。その典型例がアズマダチ調査であろう。一連の調査では，人びとからの聞き取りを重視し，言説の中から地域的な含意を読み取ろうとしている。新藤の初期の業績にも，聞き書き的な記述が散見されたが，それを意図的に自らの研究の枠組みに取り込んだのは，地理学をはじめ隣接科学でも採用されつつあったオーラルヒストリーの手法に，新藤がいち早く着目したことの証左であろう。

研究の関心は移ろいつつも，アカデミズムとは一線を画した在野の研究者が，60年近くも１つのフィールドを凝視し続けた例は，おそらく多くはなかろう。その点からも本書は希有な定点観測の記録である。

新藤は教職にありながら，富山県の地理学を主導した１人である。とくに砺波平野の地理学的研究にはすべて，新藤が何らかの形で関わっているといっても過言ではない。富山県には東京地学協会を範とした富山地学会があり，1950年代には石井逸太郎，その後は藤井昭二・北林吉弘が会を牽引した。新藤はその中で同年代の地理教員とともに活動した。1960～70年代前半には人文地理学分野の仲間と扇状地同人会を組織し，高度経済成長期における富山県の変貌をつぶさに記録した。その成果は，1970年に篭瀬良明・二神　弘・富山県地理学研究グループ扇状地同人会が著した『高度成長下の都市と農村』[2] として結実した。

編者の金田が指摘するとおり，新藤の研究には共同研究が多いことが特徴である。これは富山県の地理学が，個人ではなく常にチームでなされてきたことと関連する。多忙な教員たちを組織するには，単に研究上のリーダーシップだけではなく，日常的な面倒見のよさや寛容さも必要であった。また，新藤らは教育者としても多くの生徒を育て，そのうちの少なからぬ者が，地理学者として研究・教育に従事している。編者の金田はその１人である。ここまで述べてくると，本書のタイトルにある「地理学者」が必ずしも新藤１人を指すものではないことが自ずと理解できよう。

（須山　聡）

〔注〕

1）山本正三・北林吉弘・田林　明編『日本の農村空間―変貌する日本農村の地域構造―』古今書院，1987。

2）篭瀬良明・二神　弘・富山県地理学研究グループ扇状地同人会著『高度成長下の都市と農村―富山平野を中心とする研究―』古今書院，1970。